私小説について

序章 問題の提起

-日本とフランスの小説理念の比較から-

佐々木涼子

章・問題の基础

山貫をとアランスの小院理念の比較

私小説について

――日本とフランスの小説理念の比較から

序章 問題の提起

佐々木涼子

別を言わないことには何でとも始まらないかのようである。 明を言わないことには何でとも始まらないかのようである。 極めて抽象的な領域を示す用語まで、その頭に「和」あのは、これを探し出すのが困難であるほどだ。和食・洋食、和服・洋服のは、これを探し出すのが困難であるほどだ。和食・洋食、和服・洋服のは、これを探し出すのが困難であるほどだ。和食・洋食、和服・洋服のは、これを探し出すのが困難であるほどだ。和食・洋食、和服・洋服のは、これを探し出すのが困難であるほどだ。和食・洋食、和服・洋間のは言うに及ばず、洋画・日本画、邦楽・洋楽と、まずは「和」「洋」の区別を立てる習慣

私小説についてるわけでは全くない。日本人が作って着る洋服があり、同じく日本人がいるか、考えてみるといささか不明瞭である。関った人間が問題にされところで、これらの区別がいったい如何なる根拠に基づいて行われて

作曲して演奏する洋楽がある。もの自体が西洋のものだということでさたいだのであるはずなのに、これを洋食と言うとどこかおかしな気が確かに洋食であるはずなのに、これを洋食と言うとどこかおかしな気が確かに洋食であるはずなのに、これを洋食と言うとどこかおかしな気が確かに洋食であるはずなのに、これを洋食と言うとどこかおかしな気が確かに洋食であるはずなのに、これを洋食と言うとどこかおかしな気が確かに洋食であるはずなのに、これを洋食と言うとどこかおかしな気がないだろうか。つまり、「西洋の」という意味であるはずの「洋」の中に安定した位とが、あるいは「西洋」という形容詞を本家本元で使ってみると何とも奇妙な感じがするという現象がある。例えばフランスで食べる料理はも奇妙な感じがするという現象がある。例えばフランスで食べる料理はも奇妙な感じがするという現象がある。例えばフランスで食べる料理はも奇妙な感じがするという現象がある。例えばフランスで食べる料理はも奇妙な感じがするという現象がある。例えばフランスで食べると何とも奇妙な感じがするという現象がある。

字は、必ずしもその字づら通りの内容を持ってはいないのである。「洋」とは「洋風」、つまり「西洋への傾斜を持った」ということであって、とは「洋風」、つまり「西洋への傾斜を持った」ということであって、それぞれの事物・事象の背後に想定され得る、西洋的な、あるいは日本のな感覚、理念の体系といったものも、これをどの水準で捉えるかによって、そこから生じる区別もまちまちであるから、区別の正確さ、厳密さということになると、きわめて疑わしいと言わざるを得ない。事実、日本にあって純粋に日本的であると感じられていた事物を、たとえばョ日本にあって純粋に日本的であると感じられていた事物を、たとえばョーロッパの一小村の古い習慣として見出すということも、ままあることなのである。

それにまた、「和」「洋」という分け方がいかにも良い加減である。「洋」 の由って来るところは、あるときはヨーロッパまたはアメリカ、あるいは限られた一国、 一地域であるかと思えば、外国全般を指したりもする。同様に「和」の 方も、日本であったり、往時の日本であったり、あるいはまた東洋であ ったり、そのなかの限定された地域であったり、あるいはまた東洋であ の生成を考えてみれば、それもまた当然のことかもしれない。

か。和小説とか洋小説などという言い方は耳にしたことがない。ても小説がこの難を逃れているように見えるのはどういうわけだろうととほどさような「和」と「洋」の氾濫のなかにあって、文学、わけ

確かに西洋文学、フランス小説とは言う。しかしこの場合は、西洋あるいはフランス国において産出された文学作品ということであって、先ない。西洋文学は西洋人が西洋風人間でないのと同様に金無垢である。ない。西洋文学は西洋人が西洋風人間でないのと同様に金無垢である。ない。西洋文学は西洋人が西洋風人間でないのと同様に金無垢である。

選にすることはできない。 選にすることはできない。 選にすることはできない。。 選にすることはできない。。

が言語のみを素材とも道具ともしているということであり、他の一つ定している二つの条件を挙げることができるだろう。その一つは、これそれよりも遙かに妥当な理由として、小説という一芸術ジャンルを規

る制限も受けないということである。は、言語に関わるという以外に、形式の上からも内容の上からも如何な

これが音楽や絵画であれば、まず楽器や画材という具体的な手段の別のように取り替えのきく代物ではない。殊に小説を書き得るほどの国具のように取り替えのきく代物ではない。殊に小説を書き得るほどの国語となれば、余程の例外は別として、一人の人間が一生の間に二つと持語となれば、余程の例外は別として、一人の人間が一生の間に二つと持語となれば、余程の例外は別として、文学はまず国語の別に区別されることになる。

文学の中でも、たとえば和歌や俳句、フランスの十二脚韻詩のように文学の中でも、たとえば和歌や俳句、フランスの十二脚韻詩のように文学の中でも、たとえば和歌や俳句、フランスの十二脚韻詩のように

の移植は、本当に開花、結実を見ることができるほどに十全であり得るい。そのために外国語の移植ということも、詩のように第一歩から決定的な挫折ないしは妥協を余儀なくされることはないのである。だが、その移植は、本当に開花、結実を見ることができるほどに十全であり得るの移植は、本当に開花、結実を見ることができるほどに十全であり得るのだろうか。

て、日本文学の仏語訳が続々出版されている。そのこと自体はとにもかには、やはり微妙なものにならざるを得ない。例えば芭蕉の、 で、日本語のように、きわめて自閉症的な言語を母国語としたときには、 に日本語のように、きわめて自閉症的な言語を母国語としたときには、 に日本語のように、きわめて自閉症的な言語を母国語としたときには、 にいう手段を通じてもたらされたものとは、実のところ何だったのだが、その翻訳によってもたらされたものの一切を取り除いたら、全体の だが、その翻訳によってもたらされたものとは、実のところ何だったのだが、その翻訳によってもたらされたものとは、実のところ何だったのたが、その翻訳によってもたらされたものとは、実のところ何だったのたが、その翻訳によってもたらされたものとは、実のところ何だったのたが、その翻訳に対する日本人としてのくにも喜ばしい限りだと思うのだが、その翻訳に対する日本人としてのくにも喜ばしい限りだと思うのだが、その翻訳に対する日本人としてのくにも喜ばしい限りだと思うのだが、その翻訳に対する日本人としてのといきでは、やはり微妙なものにならざるを得ない。例えば芭蕉の、

古池や蛙飛び込む水の音

に帰着させたら良いのであろうか。古い池にカエルが飛び込んでポチャという句の訳を読んで、オリジナルから受けるのと寸分違わぬ感動を受という句の訳を読んで、オリジナルから受けるのと寸分違わぬ感動を受という句の訳を読んで、オリジナルから受けるのと寸分違わぬ感動を受という句の訳を読んで、オリジナルから受けるのと寸分違わぬ感動を受という句の訳を読んで、オリジナルから受けるのと寸分違わぬ感動を受という句の訳を読んで、オリジナルから受けるのと寸分違わぬ感動を受という句の訳を読んで、オリジナルから受けるのと寸分違わぬ感動を受という句の訳を読んで、オリジナルから受けるのと寸分違わぬ感動を受

内容になのか、翻訳者が日本語の原詩に対して働かせた感受性になの 質なものである筈で、それ故に、掛け替えもなく本質的なものを、その が感じとったところと、仏語訳の創作者として同じ訳者がフランス語で の上なく優秀で、日本語の持つ美と力を限なく感じとり、見事なフラン 語の象徴、 次元空間における二本の直線のように、たったひとつの交点を共有する の上に具体化されたオリジナルの句と仏訳とは、見るからに別物で、三 都度振り落としていかなければならないはずである。そのようにして紙 段階において、文学的な密度が高ければ高いほど、その感覚は相互に異 感じたものとが一直線につながっているという保証はどこにあるだろ 表現したものと、それを読んでオリジナルを知らないフランス人読者が ス語に表現したとしても、日本語のオリジナルと、その読者として訳者 ン!と水の音がした(仏訳を和訳すればそういうことになる)、 されて、とうてい同じものとは言い難いからである。 うこと以前に、 ことすらおぼつかない。というのも、池=étang, 蛙=grenouilleという あるいはフランス語としての表現力になのだろうか。その訳者がこ むしろ、ひとつの詩句を訳すという一連の行為の中に想定される各 喚起するものが、二つの文化体系の中で全く異っているとい 現実に存在する池が、気象条件や周辺の環境などに左右 という

の大半をかけてすがってきたように思われる。ボードレールに、ヴェルこのようにも不確かな翻訳というものに、しかし日本近代文学は体重

に感動であったのか、後らは自らの感動を如何に分析し認識して、何にた感動であったのか、彼らは自らの感動を如何に分析し認識して、何に定立ととまことに頼りなく、蜃気楼を見るような思いにさせられるのである。とまことに頼りなく、蜃気楼を見るような思いにさせられるのである。とまことに頼りなく、蜃気楼を見るような思いにさせられるのである。で、一方から見ると素通しだが、もう一方から見ると何も見えない。芭蕉の仏訳が日本人の多くにとってそうであるように、翻訳作品は原産国の側からは何の意味もないが、逆に翻訳作品しか読むことのできない側から見ると、それが全てである。翻訳に頼るほかに方法が無いが故に、翻訳と原作との差ということも測りようはなく、結果的には翻訳と原作を同一視してしまうのである。

およそこのあたりから始められねばならない。体を、人がいまだに摑みかねているからであろう。われわれの探索は、体を、人がいまだに摑みかねているからであろう。われわれの探索は、はならには、答は否定の方に傾きそうであった。では小説ならばどうだが原作と翻訳は、果たして文学的に等価なのだろうか。先に見た詩だが原作と翻訳は、果たして文学的に等価なのだろうか。先に見た詩

何かをものがたるものだということである。ところが何をものがたるのの点だけは言えるだろう。繰返えせば、文章による表現であることと、小説とは、まことに定義の下し難い代物である。だが先に述べた二つ

を貫くストーリーとか、登場する人物像などが必須のものとされていたを貫くストーリーとか、登場する人物像などが必須のものとされていたが、現在ではそれすら疑問視されている。登場人物の代りにもっと漠然が、現在ではそれすら疑問視されている。登場人物の代りにもっと漠然とした人間像ということを言う人もいるが、ここまで来ると、小説は、というには余りに心もとない。何かをものがたるにしても、その何かが全く定め難いのであれば、何も語らないのと違いはない。そこで、小説は、は何かを語ろうとするものではない、という考え方も出てくるわけである。

を基盤とするほか無いのは殆ど自明のことである。という地点にとどまることにしよう。翻訳小説が問題になる場合、それとかり、われわれとしては、当面、小説は何かをものがたるものだ、

において果たす役割は、一般に信じられてきたよりも遙かに大きく、ま両者の間には密接な関係があって、一方を他方から切り離して単独で論ずることなど不可能であるには違いない。が、私自身は、いわゆる文章であるとなど不可能であるには違いない。が、私自身は、いわゆる文章であるとなど不可能であるには違いない。が、私自身は、いわゆる文章であるとなど不可能であるには違いない。が、私自身は、いわゆる文章であるとなど不可能であるには違いない。が、私自身は、いわゆる文章であるとなど不可能であるにおいて果たす役割は、一般に信じられてきたよりも遙かに大きく、まにおいて果たす役割は、一般に信じられてきたよりも遙かに大きく、まにおいて果たす役割は、一般に信じられてきたよりも遙かに大きく、まにおいて果たす役割は、一般に信じられてきたよりも遙かに大きく、まにおいて果たす役割は、一般に信じられてきたよりも遙かに大きく、まにおいて果たす役割は、一般に信じられてきたよりも適かに大きく、まにおいて果たす役割は、一般に信じられてきたよりなどである。

私小説について

だが、翻訳による外国小説の受容に限定して言えば、作品を構成する こつの要素のうち、文章についての配慮はほぼ完全に除外され、いわゆる内容のみが関心の対象となってきたと言って、ほぼ間違いあるまい。 もっと言えば、翻訳小説について考えるとき、人は、文章という問題の 兄弟!」式の、際限もなく楽観的な人道主義に立ってしまうのである。 兄弟!」式の、際限もなく楽観的な人道主義に立ってしまうのである。

なのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。となのだが、これも考えてみれば無理のないことであるかもしれない。と

しかし、内容の点から見たとき、日本の小説と西洋の小説は本当に同じものなのだろうか。違うのは国語だけで、それを別にすれば小説に国籍の違いなどあるはずはないと言えるだろうか。あるのは手法という表面的な問題だけで、小説の本質については洋の東西に断絶は無いと、その違いということではなしに、小説の「内容」のあり方そのものから来る洋小説と和小説の別は無いのか、ということでもある。

違いはどこにあるか。」という問いを投げかけている。しかし、こうしる。確かに、たとえば伊藤整は『逃亡奴隷と仮面紳士』のなかで、「1)る。確かに、たとえば伊藤整は『逃亡奴隷と仮面紳士』のなかで、「1)る。 この点については今まであまり議論されたことが無いよう に 思 わ れ

た着眼はむしろ珍しいものだったのではないだろうか。伊藤整自ら、「作家の仲間では比較的理論好きと思われる私自身が分らないのである。(……)批評家たちは、(……)上記のような問題は、つとに自明の、解決ずみの事であるとして難解な論議を発展させている」と述べている通りである。私小説について、きわめて鋭い指摘をふくむこの論文については、改めて言及する機会があると思われるが、しかし尚、日本と西洋の違いについては、問題は未解決のままに残されていると言わざるを得ない。

それというのも、西洋との接触が始まって以来の日本の文学界の関心は、専ら、如何にして西洋文学を導入・消化するか、もしくは、如何には、専ら、如何にして西洋文学を導入・消化するか、もしくは、如何には、専ら、如何にして西洋文学を導入・消化するか、もしくは、如何にに、当然ながら歯止めをかける性質のものだったからであろう。言葉を変えれば、小説においても、西洋と日本の問題を先進と後進というふうにとらえることが一般的だったということである。一本の線上の二点として、より進んでいる一点に如何にして追いつくかという考え方をするして、より進んでいる一点に如何にして追いつくかという考え方をすると、二つの点の質的な差は無視されてしまう。もしかすると、二つの点は、実は一本の線上にあるのではなく、それぞれに異なる軌跡と方向を持つものであるのかもしれないのに。

うてともまた、それに劣らぬ関心の的なのである。 さて、表題から既に明らかなように、われわれはこれから私小説について考えようとしているわけであるが、それはこの私小説というものへの興味もさることながら、日本と西洋、わけてもフランスにそのものへの興味もさることながら、日本と西洋、わけてもフランスにそのものへの興味もさることながら、日本と西洋、わけてもフランスにないて、小説を真に小説たらしめているもの、言ってみれば小説のエッセンスとしての小説的なものに大きな違いが見られるのではないかといせンスとしての小説的なものに大きな違いが見られるのではないかといせンスとしての小説的なものに大きな違いが見られるのではないかというという。

うことになるが、まずは個人的な体験を語ることから始めたい。そのあたりの経緯をもう少し分り易くするために、いささか道草をく

は自覚するに至らなかったのである。

・小説に対する自分の好みを大学でのフランス文学専攻というかたちで
は自覚するに至らなかったのであったから、自分自身の好みすら明確に
を千差万別の方法で呈示する個性的な世界観に、前後の脈絡もなく我を
を千差万別の方法で呈示する個性的な世界観に、前後の脈絡もなく我を
を千差万別の方法で呈示する個性的な世界観に、前後の脈絡もなく我を

作品が、そもそもそのような機能を構造的に持ってはいたのだが、私個ついての省察に結びつく、プルーストの『失われた時を求めて』というストとの関わりを通してである。感覚的な感応がそのまま自己と小説に小説全般について少し深く考えるようになったのは、おそらくプルー

私小説について

人としてもまた、強い倦怠感と再発見の目覚ましさの交錯するプルース人としてもまた、強い倦怠感と再発見の目覚ましさの交錯するプルース人としてもまた、強い倦怠感と再発見の目覚ましさの交錯するプルーストは、フランス小説中の三叉路いや五叉路の交点にも立つものとして、彼の前を近れてからのが、いいいできない、そのような志向を予め持ってもいたのだろう。小説的なるものを座標軸に定めることによって、プルーストは、フランス小説中の三叉路いや五叉路の交点にも立つものとして、彼の前後左右に群なす小説作品と小説理念に解明の光を投げかけると同時に、彼の前の小説的なものを、それが如何にちっぱけなものであれ、育くむゆなりの小説的なものを、それが如何にちっぱけなものであれ、育くむゆなりの小説的なものを、それが如何にちっぱけなものであれ、育くむゆなりの小説的なものを、それが如何にちっぱけなものであれ、育くむゆなりの小説的なものを、それが如何であることを止め、私に私

思いを語ることでもあった。

思いを語ることでもあった。

本のような状況の中で、私は小説的なもの=ロマネスクについての感色を自分の言葉に置き直してみることでもあれば、また、でき得る限りたな半径をとりつつも、やはりプルーストの周囲を巡って、それへの表を自分の言葉に置き直してみることでもあれば、また、でき得る限りたる。

にもかかわらず、自分の書いていることが専らフランス小説にのみ照準説について語るために、具体的な指示はできる限りさけるよう心掛けたけではなく、むしろ国や言語による垣根を取りはずしてより普遍的な小いわけにはいかなかった。それは、殊更フランス小説に限定しているわいわけにはいかなかった。それは、殊更フランス小説に限定しているわいたところが、既に書き始めの部分から、私はある重大なことに気がつかな

私小説について

を合せたものだ、ということである。個々の作家や作品について考えているときには、いつの間にかその人なり小説なりの内的秩序に同調しているときには、いつの間にかその人なり小説なりの内的秩序に同調してない。気がついても、その場合はむしろ同調そのものに意味があるといない。気がついても、その場合はむしろ同調そのものに意味があるといたややもすれば指し示す方向が、私には気になってならなかった。私としては、日本の小説とフランスの小説の区別を越えて、小説全般についておでするにかなかった。私にとって最も大きな抵抗は、「小説」と「小説的なも方をすれば、私にとって最も大きな抵抗は、「小説」と「小説的なも方をすれば、私にとって最も大きな抵抗は、「小説」と「小説的なも方をすれば、私にとって最も大きな抵抗は、「小説」と「小説的なも方をすれば、私にとって最も大きな抵抗は、「小説」と「小説的なも方をすれば、私にとって最も大きな抵抗は、「小説」と「小説的なも方をすればしか光を当てない。その蔭の部分を、私は分っていて無視するほかなかった。「小説」は実のところ小説ではなく、フランス語のするほかなかった。「小説」は実のところ小説ではなく、フランス語のでman だったのである。

に反して、このゼミは、私には予想外の難航ぶりを見せたのである。と共に読んで楽しめばそれで良いという、まことに望みの低い当初の意図いう、一般教養よりも尚入門的なゼミを受け持つことになったのだが、即は出しの教師として、大学一年生を対象に「フランス小説を読む」という、一般教養よりも尚入門的なゼミを痛感させられる経験があった。

「一向に面白くない」と口を揃えて言うのである。初めのうちとそ、学「一向に面白くない」と口を揃えて言うのである。初めのうちとそ、学生の理解力の水準の低きを嘆いていた私は、しかしそのうちに、問題は生の理解力の水準の低きを嘆いていた私は、しかしそのうちに、問題は学生はどちらかと言えば小説好きを自認しているものの、極く少数の例学生はどちらかと言えば小説好きを自認しているものの、極く少数の例学生はどちらかと言えば小説好きを自認しているものの、極く少数の例学生はどちらかと言えば小説好きを自認しているものの、極く少数の例学生はどちらかと言えば小説好きを自認しているものの、極く少数の例が苦々し気にもらす感想は判で押したように決まっていて、「現実味にだしく、本当とは思えない」、「人物が浮ついていて、誠意が感じられない」、「ストーリーがあれよあれよと言う間に進んで、気持がついていかない」という。しかも彼らは最後に、「翻訳のせいかもしれないかない」という。しかも彼らは最後に、「翻訳のせいかもしれないかない」、「人物が浮ついていて、誠意が感じられない」という。と付け加えるととも忘れなかった。

私はと言えば、「小説を楽しむ」という目標をかかげた責任上、それぞれの小説の、どこが、どんなふうに、なぜ面白いかということを必死で説明することになるのだが、それは多くの場合、彼らが挙げた欠点をらは、「なるほど!」とこちらが気抜けする程単純に見方を変えることもあれば、「そう考えれば面白いことは面白いかもしれないが、そのような浅薄な面白さは、小説の本当の魅力とは思えない」と喰い下ることもあった。そして、こうしたやりとりを何度となく繰り返すうちに、私もあった。そして、こうしたやりとりを何度となく繰り返すうちに、私もあった。そして、こうしたやりとりを何度となく繰り返すうちに、私もあった。そして、こうしたやりとりを何度となく繰り返すうちに、私もあった。そして、こうしたやりとりを何度となく繰り返すうちに、私もあった。そして、こうしたからとりを何度となく繰り返すうちに、私もあった。そして、こうしたからとりを何度となく繰り返すうちに、私

そちらの方を楽しむ心境になっていった。はいつかそのやりとりをパターン化して捉えるようになり、小説よりも

この経験から私が実感として得たことは次のようなものだった。

揮する。

ものを感じないではいられなかった。 とえば人がサーカスのアクロバット演技に対して覚えるような人為的な て、私はそれまでの自分自身のフランス小説に対する姿勢のなかに、た 方向性において、 ようなものに他ならない。もしそのような努力を全くしなかったとした ランス文学を選んでこの方、努力によって身につけた精神の運動能力の が学生に向かって話したフランス小説の面白さとは、すなわち、私がフ てない。少くとも翻訳小説の領域では、 を備えた人間なら一読して必ず分るはずだ、というようなものでは決し いのではない、ということ。良い小説の良さは、一定の理解力と感受性 優れた小説は、 私は彼ら学生と同じ考え方を、その水準においてというよりはその 生まれながらの技術ではなく、習得されるべきものなのである。私 したのではなかっただろうか。そう思ったとき 初 たとえばおいしい果実がおいしいように一義的に面白 ない。小説の読み方、楽しみ方 8

でも面白くないと、私が言いたいのはそんなことではない。それについちで出てくるから、そうした事柄について多少とも知識が無ければ読んそのなかにはわれわれ日本人があまり良く知らない事物が具体的なかた外国小説というのは、当然ながら外国の人間の生活を描いたもので、

心惹かれるというエクゾティスムの原理は、小説において大きな力を発ては、答はイエスでもあればノーでもある。未知のものだからかえって

それよりも問題は、二段階も三段階も飛び越して、人が最も普遍的であると信じている部分にあるのだ。人が着るものや食べるものは世界各地で異なっても、人が人生において突き当る問題には大差はない。どこう人間を描いた小説は遍く人を感動させるかというと、これがそうではない。苦しみ喜びが同じでも苦しみ方、喜び方に違いない。だからそういちなお、これを小説という額縁に入れて眺めるときのそのやり方に一定もなお、これを小説という額縁に入れて眺めるときのそのやり方に一定の方式があって、それが国によって異なるものなのではないか、と思うのである。

結論を言ってしまえば、小説には型というものがあるのではないか、ということによってはじめて可能になるのではないか、ということである。あるいは、不特定多数の作家と不特定多数の読者のされ共有される小説の原型があって、小説を楽しむという行為も、この原型を学ぶことによってはじめて可能になるのではないか、ということである。

のではある。だがそうした変化のなかにも一貫して変らぬものはあるにその型は、細かく言えば、同じ国のなかでも、時代と共に変化するも

家の努力も、不毛に空転するところがあったのではないかと思うのであり、私個人が深い関心を抱いている二つの小説像について言えば、日本の小説とフランスの roman は違うのである。そしてとの点に関する考の小説とフランスの roman は違うのである。そしてとの点に関する考察の努力も、不毛に空転するところがあったのではないだろうか。つま違いないので、われわれがそうした小説原型に最も大きな差異を見るこ

かにされるのではないかと思われたからである。考察する過程で、日本における小説的なものの輪郭が幾分なりとも明ら味を覚えるようになった。と言うのも、この日本独特の小説像について味を覚えるようになったとき、いわゆる私小説に私はこれまでにない興とでうして、日本における小説的なもの、あるいは小説の原型というこ

つつも、一方で心引き裂かれる痛みもないではない。
ちに、これは一種の比較文学的試みである。が、また同時に、これまでフランス文学という領域での修業を志していた私にとって、いわば里帰りのようなものでもあって、本音を言えば、甘くほろ苦いものに浸される。が、また同時に、これまで、

ときに、いわゆる比較文学的観点がどれほどの意味を持ち得るか、これ文学というものが結局は個人の深奥以外からは発し得ないものである

みることも無意味なことではないかもしれない。 までの私ははなはだしく懐疑的であったと言わざるを得ないのだが、しまでの私ははなはだしく懐疑的であったと言わざるを得ないのだが、しまでの私ははなはだしく懐疑的であったと言わざるを得ないのだが、しまでの私ははなはだしく懐疑的であったと言わざるを得ないのだが、しまでの私ははなはだしく懐疑的であったと言わざるを得ないのだが、しまでの私ははなはだしく懐疑的であったと言わざるを得ないのだが、しまでの私ははなはだしく懐疑的であったと言わざるを得ないのだが、しまでの私ははなはだしく懐疑的であったと言わざるを得ないのだが、しまでの私ははなはだしく懐疑的であったと言わざるを得ないのだが、しまでの私ははなはないかもしれない。

判を試みると共に、私小説像の再構築を図りたいと思っている。言っても、これと言って取っておきの方法があるわけではない。当面考えられるのは、私小説の特徴を洗い出した上で、この定義にあてはまりたがあるのは、私小説の特徴を洗い出した上で、この定義にあてはまりないのであること。一方、フランスの小説論、文芸批評の類から、フランスにおける小説の原型とも言うべきものを想定して仮説的な私小説批ンスにおける小説の原型とも言うべきものを想定して仮説的な私小説批ンスにおける小説の原型とも言うべきものを想定して仮説的な私小説出りない。当面考えて、フランス小説との比較において日本の私小説について考えると

説的なものを、それぞれに、これまでよりいささかなりとも深く実感すしい解明が待ちうけているというわけでは恐らくないのであって、せいぜい期待できるのは、ほかでもない私自身が、現にあるがままの私小説ぜい期待できるのは、ほかでもない私自身が、現にあるがままの私小説もっとも、そのような探索の行く手に前人未踏の結論ないしは目ざま

るという、その程度のことだろう。

すると二つの大きな困難が伴っているからである。 そのように謙虚にならざるを得ないというのも、この試みには、 大別

あるのだから。 私小説とはいかにも言い古された議論で、先人の言いつくしたことに加(9) と対比して考えると、この論考、先行きまことにおぼつかない。しかも えてこの先何が言い得るか、まずはその方に賭けたくなるような問題で と狂いのない理解力が要求されるということで、この点を私個人の能力 その一つは、フランス文学と日本文学について、きわめて該博な知識

二番目の障害はより内在的な性質のものである。それは、私小説という も言おうか。 理化に対する拒否の姿勢そのものを自らの存在の支えとしている、とで 理論づけを拒否しているように思われるということである。あるいは論 概念そのものがきわめて矛盾にみちていて、且つ、あらゆる定義づけ、 扱う人間の資質ということは、結局は問題の外にあることだろうが、

まに挙げてみることで、このあてどない航海のスタートとしよう。 そこで、私小説という問題に内在する矛盾にみちた特徴を思いつくま

第一の矛盾は、その発生から定着への過程のなかに見ることができる

私小説について

ると思われる。 評価すべきだ」という意見は、おおよそ現在の最も一般的な考え方であ しようもないもので (……)、 むしろ日本の独創的なリアリズムとして て」のなかで言われた「私小説というのは西洋の理論で斬ったってどう(1)) で、つい先どろ、雑誌「国文学」の「共同討議/『私小説論』をめぐっ にあるまい。その傾向は時代が下るに従ってますます大きくなるよう れほどまでに「わが国独自」のレッテルを貼りまくられた文学用語は他 する点については、ほぼ例外なく意見の一致を見ているようである。 どの文学辞典、文学史を見ても、私小説が日本独特のものである、 ٤

極めることは、私小説の本質の解明の一助となるに違いない。 ては、どのように必然的な内的要因が働いていたのだろうか。それを見 本固有のものとして外部との精神的連繫を断ち切るに至った次第につい ば洋風小説だったのである。それが一定の過程を経たのちに、完全に日 いたわけではない。それどころか、その発生時点においては、言うなれ まり、私小説は初めから「日本独自のもの」という自意識に支えられて 導入に刺激されて、とするのが、これまた一応の定説になっている。つ ところが、その発生についてはと言えば、フランスの自然主義文学の

その存在を主張し続けてきたという側面である。もともと私小説とは けられた批判の集合的イメージとして成立し、批判さるべきものとして 第二に興味深く思われるのは、私小説という概念が、小説に対して向

「無暗に『私』という訳の分らない人物が出て来て、その人間の容貌は「無論のこと、職業にしても、性質にしても一向書かれなくて、そんなら何が書いてあるかといふと、妙な感想の様なものばかりが綴られてゐる」といったまともな小説にすらなっていないダメ小説に対して向けられた侮蔑的な言葉であった。「私」のことしか書いていないけれども、れた侮蔑的な言葉であった。「私」のことしか書いていないけれども、れた侮蔑的な言葉であった。「私」のことしか書いていないけれども、に現存するにもかかわらず、自発的な定義を持たず、また整然たる理論も持たないということである。

でないのが私小説なのである。 にないのが私小説なのである。そして唯ひとつ例外的に理論を持ささか影の薄らぐほどのものである。そして唯ひとつ例外的に理論を持い説理論の花盛りで、そのなかにあっては実体としての作品も作家もいい説理論の花盛りで、そのなかにあっては実体としての作品も作家もいい説というものの礎石が置かれて以来、日本の近代小説は数えきれない小説というもののである。

理論の導入と私小説批判という二本の柱を持っていた」といわれるが、であったと言っても言いすぎではあるまい。「日本の文芸評論は、西欧だ。いかに私小説を超克するか、まさにそれがあらゆる理論の一大目標理論を持たないばかりではない。あらゆる理論の踏台にされているの

理論の翼を借りていた、とするのが正しいのだ。ておくとして、理論の導入と私小説批判とは、実は二本の柱ではない、一本の柱、ひとつことなのである。理論化とはすなわち西欧化であったからだ。私小説を踏み台にして、それを超克して本物の小説になるべくからだ。私小説を踏み台にして、それを超克して本物の小説になるべくからだ。私小説を踏み台にして、それを超克して本物の小説になるべくからだ。

本では別として、多くの場合私小説である。 を傾けるのも一策ということになろう。それぞれの小説理念が示しては別として、多くの場合私小説だからである。幾多の小説理念が示しては別として、多くの場合私小説だからである。幾多の小説理念が示しては別として、多くの場合私小説がからである。幾多の小説理念が示している全くまちまちな矢印を逆方向に伸ばすと、それらはある一点に集斂し、その寡黙な一点が私小説の場だと言えるかもしれない。こうしてみると、私小説とはまるで台風の眼といわれる無風地帯のようではない。風向きということを考慮に入れるとすれば、遠心分離機の中心の真空状態だと言うべきだろうか。小説というものを、精神の収斂と見るかではない。 ではないると、私小説とはまるで台風の眼といわれる無風地帯のようではない。 ではない。 の裏では、それらはある一点に集斂が、こうしてみると、私小説とはまるで台風の眼といわれる無風地帯のようではないると、との実践な一点が私小説の場だと言えるかもしれない。こうしてみると、私小説とはまるでは、それと明言するか否か。

こと改めて私小説の項目を掲げていないものも稀ではない。たとえば、い。事実、見方によってはその通りなので、数ある文学史のうちには、れば、どんなにか影の薄い、片隅の存在かと思われてもしか た ある ましてのみ扱われ、しかも自らを語ることのきわめて寡いということになさて、そのように否定的なイメージとして成立し、専ら批判の対象と

先に比較文学的観点などと大それたことを言ってしまった口はばったさを、今ひと回りもふた回りも小さくして、この小文の目的を「如何にしを、今ひと回りもふた回りも小さくして、この小文の目的を「如何にしたの存在は余りにも自明で生々しく、それ故に、かえって定義をも説明その存在は余りにも自明で生々しく、それ故に、かえって定義をも説明をも必要としない程のものなのである。私小説というものの第三の、そをも必要としない程のものなのである。私小説というものの第三の、その存在は余りにも自明で生々しく、それ故に、かえって定義をも説明をも必要としない程のものなのである。

の理念において私小説とまっこうから対立すると思われていた「マルキシズム文学が、実質において、生活実践者の報告であることで、私いキシズム文学が、実質において、生活実践者の報告であることで、私い説』の長江に参じて」おり、しかも「明治、大正、昭和を通じて、日本文学の佳品の少くとも過半数は、正直にいってこの『私小説』ジャンルから生まれている」のが、まぎれもない事実なのである。

れはしかたがないと思うが、ぼくにとっては癪のタネ」で、「嘘である人が大多数で、いかにも架空の話といった小説を喜ぶ人が少いのは、こんな生易しいものではない。「本当にあったような話、というのを喜ぶんが生易しいものではない。「本当にあったような話、というのを喜ぶ日本文学のなかで私小説という「魔物」から逃れ得るものと言えば、日本文学のなかで私小説という「魔物」から逃れ得るものと言えば、

私小説について

ある。 たとが最初からわかっている小説のジャンル、つまりSFを選んだのものではなかったかと思っている」筒井康隆でさえ、その作品の発想に、いかに多くの私小説的なものを含んでいるか、いま時間をかの発想に、いかに多くの私小説的ジャンル、つまりSFを選んだの

それよりも尚、私小説の根強さの証拠は、筒井康隆も言うように、読者の側にある。小説のなかから、「これは作者が実際に体験した本当のことだ」と思えるものを、あたかも土砂のなかから砂金を選り出すように探し出し、それを自ら構築しつつある想像的な世界の支えとする、言に探し出し、それを自ら構築しつつある想像的な世界の支えとする、言完遂し得ないわれわれ、ひとりひとりの中にある。そしてその傾向は、完遂し得ないわれわれ、ひとりひとりの中にある。そしてその傾向は、行者その人について何らかの予備知識――文庫の解説程度のものであった者その人について何らかの予備知識――文庫の解説程度のものであった者である。一一を持っているときには、いやが上にも昂まるのである。日本で発行される小説本に必ずといって良いほど解説が付されているゆえんではあるまいか。

は、作家の内的傾向のままに極限まで理想化されたそれ、時によってはが、作家の心はおそらく読者のイメージでいっぱいである。その読者とは、読者の思うところ感じるところをたいして示しては くれない。だは、読者とは、畢竟、黙せるのみの存在であって、われわれは、これに関

自分自身に他ならないそれであるかもしれないが、しかし何らかの読者自分自身に他ならないそれであるからである。話を私小説にもどせば、私小説の特異性は、読者の設定のされである。話を私小説にもどせば、私小説の特異性は、読者の設定のされである。話を私小説にもどせば、私小説の特異性は、読者の設定のされるからである。話を私小説にもどせば、私小説の特異性は、読者の設定のされり自身に他ならないそれであるかもしれないが、しかし何らかの読者

以上、日本独自の私小説の、まるで縺れた糸玉のように自閉的で、しいう試み自体が何とも無意味なものに思われてくる。確かに、先に引用した言葉にあった通り、私小説を外国の文学理論を用いて解明、処理用した言葉にあった通り、私小説を外国の文学理論を用いて解明、処理的字宙観の唯中にいてこれを論ずることも、たいていは糸の縺れの内へ内へともぐる一方で、それに劣らず不毛な業なのである。これまでに書かれた数え切れない私小説論は、おおかた、この二つの誤ちのうちのどちらかに陥っていたように、私には思われる。

姿である。サルトルは言う。「ブロックや、クレミューや、シュアレス出すのは、サルトルが『ユダヤ人』の中で描いている反ユダヤ主義者の出すのは、サルトルが『ユダヤ人』の中で描いている反ユダヤ主義者の

さんより、フランス文学の傑作の理解力において劣るなどということが言じられようか。 (……) プルーストは、半ばユダヤ人だから、ラシーヌは半分しかわからないのであろうか。」 だが、「(反ユダヤ的国粋主要は半分しかわからないのであろうか。」 だが、「(反ユダヤ的国粋主を理解することは、決してないであろうと。(……) ユダヤ人は自分より正確なフランス語の誤りを犯しても、この言葉の真髄に副っている。」 たとえフランス語の誤りを犯しても、この言葉の真髄に副っている。」 たとえフランス語の誤りを犯しても、この言葉の真髄に副っている。」 たとえフランス語の誤りを犯しても、この言葉の真髄に副っている。」 であることは確かだし、また文学というものが、もともとそのような性であることは確かだし、また文学というものが、もともとそのような性質を持つものであることも事実ではあるのだが。

る。小説のなかな

*

小説は時とともに変容、変質する。フランスにおいても、ロマネスクであるというほかないのである。
かはなく、しかもそのどちらも小説という様式によってのみ満され得ってはなく、しかもそのどちらも小説という様式によってのみ満され得る人間の深い欲求のほとばしり出るところだという意味においても、ロマネスクであるというほかないのである。

注

- のわかるものではない。 ど、まずは言い出した本人にその意味を訊ねてからでなくては、一見して訳ど、まずは言い出した本人にその意味を訊ねてからでなくては、一見して訳な
- Le vieil étang une grenouille y saute pfloc!

le bruit de l'eau

Ramon Fernandez あたりまでは、確実にそのような考え方をしている。

たとえば、彼の De la personnalité

(3)

ある。 五八)の「不信」とは、すなわち、作中人物に対する小説家と読者のそれで五八)の「不信」とは、すなわち、作中人物に対する小説家と読者のそれで(4)ナタリー・サロートの『不信の時代』(白井浩司訳)紀伊国屋書店 一九

私小説について

- (ii) Michel Zéraffa, Personne et personnage, Klincksieck, 1969
- か。」Alain Robbe-Grillet, Pour un nouveau romanか。」Alain Robbe-Grillet, Pour un nouveau roman
- (7) 伊藤整全集第十巻、河出書房
- (8) 「ふらんす手帖」3、6、7、8、9号の拙稿(昭和40~昭和55)
- かもしれない。
 書こうとするものも、終り方は知らず、始め方だけは追随の謗りを逃れない小説に変革と新たなる可能性を期待することで終るようだ。この点で、私のは、私小説論がいかに言い古された議論であるかを述べることで始まり、私は、私小説論がいかに言い古された議論で見ると、ある常套が あって、大方
- 吉田凞生 吉田凞生 出和55年2月号、学燈社 出席者——三好行雄、高橋英夫、
- 一百游点
- (昭和26)(『芸術と実生活』講談社、昭和33年)に引用されている。(迎)宇野浩二『甘き世の話』(大正9)の冒頭。平野謙『私小説の二律背反』(このことは、フランス小説のロマネスクについても言えることである。
- 近代評論集Ⅱ」、角川書店 近代評論集Ⅱ」、角川書店 (大正14)、「日本近代文学大系58
- ある。いつでも、だれでも言いそうなことには違いない。「これはいつごろ、だれがいったことだっか」と、ある文学者の言葉として(14 昭和55年2月4日の「朝日新聞」の『文学の現況』と題するコ ラム に、
- い 『逃亡奴隷と仮面紳士』前出
- [① 中野好夫『私小説の系譜』(昭和23)「現代日本文学全集74」筑摩書房
- (18) 前記『私小説の系譜』中に、上林暁の表現とある。
- (19) 『やつあたり文化論』「嘘と法螺」新潮文庫
- 20 たとえば『乗越駅の刑罰』(新潮文庫『将軍の目醒めた時』)

年度版の「あとがき」から) (平野謙 『芸術と実生活』講談社、昭和33 説の変質にかかわっている。」 (平野謙 『芸術と実生活』講談社、昭和33 にいい、日本のでは、日本

である。) (本稿は、昭和五十五年度文部省科学研究費補助金を受けた研究成果の一部(本稿は、昭和五十五年度文部省科学研究費補助金を受けた研究成果の一部である。)



